房総のフィールド・ミュージアム　ニュースレター

しいむじな

発　行
千葉県立中央博物館
房総のフィールド・ミュージアム

連絡先
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL : 043-265-3111
https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/pickup/page-1520866135758/

2025（令和7）年3月発行

2025・春
88

特集

春はさくら

オオシマザクラ

以前、春に房総半島南部の道路を走っていると、道沿いに白色の花をつけた木を見つけました。高さ10mほどで、常緑樹林の林縁に1本立っていました。何の木だろうかと思って近寄ってみると、オオシマザクラです。私は西日本の出身で野生のオオシマザクラを見たことがなく、真っ白な花をつけるサクラに驚いたものでした。この時の記憶もあり、房総の代表的なサクラと言われるとオオシマザクラを思い浮かべるのです。

『千葉県植物誌』によると、千葉県に自生するサクラは5種、いくつかの雑種や栽培品種も確認されています。春の到来に合わせサクラを題材に、と依頼を受けました。さて、どれにしようか？と迷いましたが、一般に最も親しまれているソメイヨシノと、その両親種とされるエドヒガンとオオシマザクラについて紹介します。

（山本伸子）

房総のフィールド・ミュージアムとは

房総を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

特集

春はさくら

桜はソメイヨシノ

春のぽかぽかと暖かい日には、あちらこちらの公園で桜のお花見をする人たちを見かけます。桜は公園や川の土手沿いに並木として植えられ、その多くはソメイヨシノです。ソメイヨシノ（*Cerasus* × *yedoensis* (Matsum.) Masam. et Shig.Suzuki 'Somei-yoshino'）はエドヒガンを母親に、オオシマザクラを父親として交雑してできた栽培品種とされ、江戸時代末に東京の染井村にあった植木屋が売り出したといわれています。花は大きく、葉に先んじて沢山の花が一斉に開きます（**写真❶**）。この様子を、桜で有名な奈良の吉野山と、作出された場所にちなんで「染井吉野」と名付けられました。ただし、吉野山の桜はヤマザクラ（*Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H.Ohba）であり、江戸時代以前は桜といえばヤマザクラを指していました。

エドヒガンと学名

ソメイヨシノの母親とされるエドヒガン（*Cerasus itosakura* (Siebold) Masam. et Shig.Suzuki f. *ascendens* (Makino) H.Ohba et H.Ikeda）は、本州・四国・九州に分布し、千葉県では自生は限られます。花は淡紅色で葉より先に開きます。萼筒は壺状で、花柄とともに開出する毛が密生します（**写真❷**）。ソメイヨシノの萼筒がわずかにふくらみ有毛であることや、葉より先に花が開くところはエドヒガンの形質が反映しています。

エドヒガンには、以前は *Prunus pendula* Maxim. f. *ascendens* (Makino) Ohwi という学名が使われていました。ラテン語で「pendula」は「垂れ下がる」、「ascendens」は「斜上する」という意味です。実際はシダレザクラは野生のエドヒガンから枝が垂れるものを選抜した園芸品種ですが、学名としては最初にシダレザクラに *Prunus pendula* という種名がつけられ、後に野生のエドヒガンに「ascendens」という品種名がつけられたので、「サクラ属で（枝が）垂れ下がる種の斜上する品種」という、あべこべの意味を持つ単語が重なった学名になってしまいました。

食べて美味しいオオシマザクラ

ソメイヨシノの父親とされるオオシマザクラ（*Cerasus speciosa* (Koidz.) H.Ohba）は、伊豆諸島のみに自生し、房総半島や三浦半島、伊豆半島などで見られるものは、薪炭用として植えられたものが野生化したものとされています。花は主に白色で、葉と同時に開花します。萼筒は細い筒状で無毛です（**写真❸**）。ソメイヨシノの花が大きく花色が薄いところはオオシマザクラの形質を受け継いでいるのでしょう。

オオシマザクラはあまり馴染みがないようでいて、実は身近な植物です。桜餅に使われる葉が、オオシマザクラの葉を塩漬けにしたものなのです。葉には、桜餅独特の香りであるクマリンが多く含まれています。桜餅といえば、小麦粉を使ったクレープ風のものと、道明寺粉を使ったものがあり、クレープ風の桜餅は関東で、道明寺粉の桜餅は関西を中心として食べられるようです（**写真❹**）。以前子ども向けの植物図鑑を作った際、桜餅にクレープ風のものの写真が使われているのを見て、道明寺粉の桜餅に替えてくれ、とお願いしました。図鑑の監修者全員が西日本出身だったからです。でも出版社が東京だったからか、結局クレープ風の写真が載り、がっかりした記憶があります。

日本に野生のサクラは９種、園芸品種は３００種類以上あると言われています。皆さんはどの桜が、そしてどちらの桜餅がお好みでしょうか。

（山本伸子）

写真❶：ソメイヨシノ
（左：花、右：萼筒）
写真❷：エドヒガン
（左：花、右：萼筒）
写真❸：オオシマザクラ
（左：花、右：萼筒）
写真❹：桜餅

参考文献：
大橋広好ほか（編）２０１６．改訂新版 日本の野生植物３．平凡社．
（財）千葉県史料研究財団（編）２００３．千葉県の自然誌 別編４ 千葉県植物誌．千葉県．
池田博ほか（監）２０１３．ポプラディア大図鑑ＷＯＮＤＡ 植物．ポプラ社．

コラム

房総の動植物（８）

サクラに集まる昆虫

サクラは私たちにとって春の象徴です。このサクラを遠くから眺めるだけでなく、一本の木に目を向けてみると、そこにはさまざまな生きものの営みが広がっていることに気づきます。

特に昆虫たちに目を向けると花の蜜を求めて集まるもの、葉を食べるもの、枯れ木を棲みかとするもの……。四季を通じて多くの昆虫がサクラを利用しています。今回は、そんなサクラと関わる昆虫たちの世界をのぞいてみましょう。

花に集まる

サクラの花には、その蜜を求めてチョウやハチ、ハエなど多くの昆虫が集まります。たとえば、ヤマトシジミ *Zizeeria maha*（**写真❶**）やナミアゲハ *Papilio xuthus*（**写真❷**）はよく見ることができます。また、ニホンミツバチ *Apis cerana japonica*（**写真❸左**）やセイヨウミツバチ *Apis mellifera*（**写真❸右**）もサクラの花の蜜を集めます。サクラの花の蜜を原料とするハチミツも市販されていますが、私はまだ味わったことがありません。

葉や枝に集まる

サクラの葉も多くの昆虫に利用されており、１００種を超えるガの幼虫が食草としてサクラを利用しています。例えば、９月頃に大量発生するモンクロシャチホコ *Phalera flavescens*（**写真❹**）が有名です。名前に「サクラ」と付くサクラセグロハバチ *Allantus nakabusensis*（**写真❺**）は、幼虫がサクラの葉を食べるハチです。

リンゴカミキリ *Oberea*（*Oberea*）*japonica*（**写真❻**）は黒とオレンジの模様を持つ小型のカミキリムシです。名前のとおり、リンゴをはじめとするバラ科の植物を加害します。成虫は葉を食べ、生木の細い枝に産卵し、孵化した幼虫はその枝の内部を食べて成長します。

枯れ木に集まる

タマムシ *Chrysochroa fulgidissima fulgidissima*（**写真❼**）はサクラやエノキなどの枯れ木に産卵し、その幼虫は木の内部を食べて成長します。成虫は普段、エノキやケヤキの樹冠（木の高い部分）で生活していますが、７月の終わり頃になると、メスが産卵のために地上付近まで降りてくることがあります。もし、公園に枯れたサクラが積まれていたら、注意深く観察するとタマムシの成虫を発見することができるかもしれません。

招かれざる外来種

街路樹のサクラの幹に黒い塊が付いているのを見かけることがあります。それはヨコヅナサシガメ *Agriosphodrus dohrni* です（**写真❽**）。白と黒の模様を持つ本種は、中国原産の種で、日本では九州で１９３０年代に記録され、関東には１９９０年代に侵入しました（国立環境研究所，２０２５）。本種に限らずサシガメの仲間は肉食性で、口吻を突き刺して消化液を注入し、他の昆虫を捕食します。ちなみに、人を刺すこともあり、刺されるとなかなか痛いので、不必要に触ることはお勧めしません。サクラを食害する外来種であるヒロヘリアオイラガ *Parasa lepida*（**写真❾**）を捕食し、ヨコヅナサシガメの存在がヒロヘリアオイラガの個体数に影響を与えることが知られています（中野・瀧本，２０１１）。

また、サクラを加害する外来昆虫で、昨年千葉県への侵入が確認されたのがクビアカツヤカミキリ *Aromia bungii*（**写真❿**）です。幼虫は生きた樹木の内部を食べ、成虫になるとき、幹に穴をあけて外へ出てきます。本種は胸部が赤いことが特徴で、今後の発生状況を注視する必要があります。本種は特定外来生物に指定されており、飼育や運搬等が原則禁止されています。詳しくは千葉県生物多様性センターのＨＰをご確認ください。

ここで紹介した昆虫は、いずれも比較的身近な場所で観察できるものばかりです。また、ここで紹介した種よりもはるかに多くの昆虫が生活しています。サクラの花が咲く春だけでなく、葉が茂る夏、枯れ木となる冬まで、サクラを通して昆虫の多様な営みを観察することができます。身近な自然に目を向けながら、ぜひサクラの木を一年通して観察してみてください。

（樽宗一朗）

写真❶　ヤマトシジミ
写真❷　ナミアゲハ
写真❸　ミツバチ（左：ニホンミツバチ、右：セイヨウミツバチ）
写真❹　モンクロシャチホコ．写真は成虫だが、大量発生するのは幼虫
写真❺　サクラセグロハバチ
写真❻　リンゴカミキリ
写真❼　タマムシ
写真❽　ヨコヅナサシガメ
写真❾　ヒロヘリアオイラガ
写真❿　クビアカツヤカミキリ

引用文献

国立環境研究所，２０２５．クビアカツヤカミキリ．侵入生物データベース．https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/60560.html（２０２５年２月28日閲覧）

中野貴瑛・瀧本　岳，２０１１．ヒロヘリアオイラガとヨコヅナサシガメの外来生物間相互作用．昆蟲ニューシリーズ，14（１）：11–20.

『フィールドノート』の紹介

房総のフィールド・ミュージアムのウェブサイトには『フィールドノート』というコーナーがあります。学芸員が房総の山を歩き回って見つけた生き物や地形・地質や歴史・民俗などを写真と文章で紹介しています。毎月記事を追加していますので、QRコードからぜひご覧ください。

（樽宗一朗）

連載

小櫃川流域の生きもの
ミユビシギ
～干潟でカニを捕る～

晩秋の小櫃川河口干潟、ヨシの枯野が秋風でざわざわと揺れ動く。干潟が500mくらい沖まで顔を出し、遠くに雪をかぶった富士が見える。ハマシギやシロチドリなどが渚近くに点々と見えた。

ムクドリより一回り小さな４羽の小鳥がえさをついばみながら私の方に行進してくる。ほほ、胸、腹が雪のように真っ白で、真っ黒な太いくちばしと脚が陽を照り返して光っていた。「ミユビシギ、今年もやってきたか！」と嬉しくなった。ミユビシギは砂地の干潟をチョコチョコと走っては砂をついばみまた走る。ついばむ瞬間を撮り、カメラの液晶画面を拡大すると３～４ミリのコメツキガニの幼カニをついばんでいた。このカニは干潟に無尽蔵にいる。突然、ミユビシギが一斉に飛び立ち河口の方へ逃げ去った。空を見るとトビが翼をひろげて近づいてきていたが、しばらくするとミユビシギは、再びやってきて、えさをついばんでいた。小型のシギやチドリ類は、身を隠す場所がない干潟で生きるのは容易ではない。

ミユビシギはユーラシア大陸や北アメリカの北極圏で繁殖し、アフリカやユーラシア、オーストラリア、北アメリカ、南アメリカの温帯から熱帯域の海岸に渡り越冬する。日本では旅鳥として４～５月、８～10月に見られるほか本州中部以南では少数越冬している。砂浜や砂質の強い干潟を好んで生息し県内では九十九里浜に多い（桐原政志2000）。砂浜海岸を代表するシギで九十九里浜全域では最大4,000羽のミユビシギが飛来する（奴賀俊光ほか2006）。また、東京湾では砂質の小櫃川河口干潟には多いが、泥質の谷津干潟（習志野市）では少ない。東京湾では三番瀬（船橋市）、谷津干潟、小櫃川河口、富津岬などで越冬する（千葉県レッドデータブック2011）。

数年前と比べてこの干潟でミユビシギが少なくなったと感じているが、カニなどをたらふく食べて、無事に越冬して、次の年も雪のように白く清々しい姿を見せてほしい。

MEMO　ミユビシギ　チドリ目シギ科、全長約19㎝。
千葉県では旅鳥（春と秋の渡りの途中で通過する渡り鳥）だが、越冬する個体も多い。近年激減している。

引用・参考文献
・奴賀俊光・桑原和之・箕輪義隆．2006．新川から南白亀川までの九十九里浜の鳥類1998-2003年　我孫子市鳥の博物館調査研究報告第14巻：1-64
・桐原政志．2000．ミユビシギ　所収：千葉県の自然誌本編７　p.680
・千葉県野鳥の会．2024．2024年度版千葉県の鳥類目録．p56

（文と写真　千葉県立中央博物館ボランティア　成田篤彦）

写真❶　ミユビシギ　カニを食べる＝2024年11月30日　県選定一般保護生物
写真❷　餌のコメツキガニ＝2019年11月17日

しいむじなの由来

房総のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

今回は春号ということで、サクラの話題をお届けいたしました。楽しんでいただけたでしょうか？サクラは色々な側面から面白い話があり、まだまだ深掘りできそうな話題だと感じました。

だんだんと暖かくなってきて、生きものが動き出す時期になりました。私も昆虫採集に勤しむ日々が始まりそうです。

（樽宗一朗）